

# アトリエ 琉游舎 だより 135号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)  
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2022年7月13日発行

## 紫陽花や 昨日の誠 今日の嘘



- 近代俳句の祖と言われる正岡子規の俳句です。たまたまネットサーフィン（もはや死語かもしれませんが）をしていたら奇妙な句にあたりました。素直に詠めば紫陽花の色の変化にこと寄せて人の心の移ろいやすさを詠んだ句なのでしょう。季語は「紫陽花」、夏です。
- 句の一般的な解釈に異を唱えるつもりはないのですが、私はこの句の作者を子規と知らずに見つけたとき、「この川柳は面白い！」と思ってしまいました。情景描写にこと寄せて人の心の移り気で気まぐれなことを表現する典型的な日本人の文芸手法を、皮肉っているように見えてしまったのです。「昨日の誠が今日の嘘」であれば「昨日の嘘は今日の誠」でもあるはずです。虚実一如の世界です。移ろいゆくものにもものあわれを感じる時間的な無常感ではなく「誠の中に嘘、嘘の中に誠」という矛盾した存在が紫陽花であり人なんだよと読んでしまいました。誤読でしょうか。それとも紫陽花に対する見方の違いなのでしょう。
- 紫陽花は梅雨の花。今年はずでに梅雨が明けましたが、今が花の盛りです。一般的には土壌の酸性度によって酸性が強いと青色に、中性やアルカリ性だと赤色に花が色づくと言われてます。また咲き進むにつれて最初は黄緑色を帯び赤や青に近づいた後に、次第に赤みを帯びた色に変化しながら萎んでいきます。最近は紫陽花を観光の目玉にする寺や公園が多いようですが、私たちは手入れされた盛りの花を目にするだけで前後の11ヶ月には無頓着のようです。
- ここコリーナには紫陽花が今咲き誇っています。この紫陽花はその後色褪せ萎びたままに放置された末路を辿ります。一方伸び放題の枝葉の生命力の旺盛さは気後れがしてしまうほどです。1年を通して紫陽花の生き方と同居していると、美の中に醜があり、醜の中に美があります。子規の句は私の美醜評価や好悪観を「嘘と誠」で笑い飛ばしているようです。紫陽花に限らずコリーナの自然と年中一緒に過ごしているからこそ起こるこの複雑な「好悪」の感情も、また自然との共棲を観ずることのできる豊かな時なのかも知れません。

### 7・8月スケジュール

木 金 土 日

月	火	水	14	15	16	17
18	19	20	21 映画会 お休み	22	23	24
25	26 読書会 13時半	27	28 映画会 お休み	29	30	31
8月1日	2	3	4 映画会 お休み	5	6	7 写経会 13時半
8	9 読書会 13時半	10	11 映画会 お休み	12	13	14
15	16	17	18 映画会 13時半	19	20	21

#### 写経会

8月7日(日)  
13時半

#### 映画会

不定期の開催  
となり ご迷惑をお  
かけします

#### 読書会

7月26日(火)  
8月9日(火)  
13時半

法華経2回目の読書会  
を行っています。

私は地学への興味がなかったため、地層や地質などの地球の物理的な姿には興味が湧かずに今まで年を重ねてきましたが、仏教に皈依してからは地球も宇宙の中の生命個体の一つであるとの視点を持つようになりました。つまり私とその他の生きとし生けるもの、山川草木全ては大なる宇宙の真理（仏）によって生かされている生命体であると観ることで。地球は私と同じ生き物であり、私たちはまた地球の一部分を担う生き物です。地球はそこに存在するものたちを部分とする全体でもあります。いずれ生き物は必ず物理的な死を迎えます。また各各は「苦」の原因、貪・瞋・痴、の三毒（煩惱）からは逃れられない存在です。己の好物を貪り求める貪欲、嫌いな物を嫌悪する瞋恚、的確な判断を下せず迷い惑う愚痴の三つの毒を断ち切ることを願いながらも、そこから逃れられない己に歎き哀しみ怒る存在が私たち生き物のありのままなのです。

火山噴火は地下のマグマによって引き起こされます。大別するとマグマが直接地表に噴出するマグマ噴火とマグマに熱せられた地下水が水蒸気となり蓄積された圧力によって岩石を破壊し地上に噴出する水蒸気爆発の2種類です。噴火は地表に抑圧されたエネルギーの解放の瞬間とみることができでしょう。地球に存在するものは、太陽という外的なエネルギーを等しく受ける一方、それぞれが内在エネルギーを抱えています。人と言えば三毒という煩惱エネルギーもそのひとつです。同じように地球はマグマに代表される様々なエネルギーを内在させていると考えれば、噴火は地球が抑圧に堪えられなくなった結果の負のエネルギーの発露です。比喩的に言えば地球の不満や怒りが爆発したということです。私たちはマグマを見ることはできませんが、溶岩、岩石、火砕流を見ることはできます。それは地球の怒りの結果ですが、なぜ地球は怒っているかの原因を知ろうとはしないのです。それは地球が生命体、つまり体と心を持った生きものであるとの視点がないからです。結果から科学的に予知や被害の最小化に備えることはできても、怒りの根源を知ろうとしないければ、地球は今後も様々な形で、噴火に象徴される生命体としての心身表現を止めることはないでしょう。

地球は今、マグマが噴火口を探しながら地下で活発に蠢いているようです。冷戦終了後しばらくの期間、地球に存在するものたちの不満のマグマはなりを潜めていたようでしたが、ついにユーラシア大陸の真ん中で2月に大噴火が起きました。均衡から対立へ、協調から敵か味方かの二極化へと一気に地球のエネルギーが動き始めました。その時人間は「暴力は許さない、民主主義を守れ」と主張しましたが、未だに噴火は止みません。それは戦争という現象だけを見て、その原因となる地球の人間に対する怒りや要請を見ようとしなからずです。地球のエネルギーは人間だけに通用する政治と経済の理論だけでは到底制御できるものではありません。地球は太陽のエネルギーによって生かされています。そして人間を含めた地球上に存在するものたちは、地球と各各の存在との関係性の中で生かされているのです。地球にとってはそこに存在するもの全てが平等です。それがお釈迦様の教えです。人間同士の殺し合いだけなら、地球の生命に影響がないと考え、勝手にどうぞと見過ごしてくれていたでしょう。しかし大地や自然や気候の破壊が地球の存続を危うくしていることを置き去りにして、人間だけにしか分からない屁理屈で戦争にうつつを抜かす人間たちに、地球が愛想を尽かしても不思議はありません。人間以外の他の存在を生かすために、地球からの退場を人間に宣告する必要があると地球が考えているならば、今が、人間と地球との対話と和解の最後の機会かも知れません。

曹洞宗の祖師道元が詠んだ和歌に「峰の色 谷の響も皆ながら 吾が釈迦牟尼の声と姿と」があります。季節の移ろいとともに変わってゆく峰々の色や聞こえてくる谷川のせせらぎ、自分を取り囲んでいる自然の姿そのものの中にお釈迦様がいる、と詠んでいます。この歌は道元の自然観、地球観、宇宙観です。道元の耳に聞こえ、目に見え、肌に触れ、心に観ずるもの全てが仏そのものだということです。つまり私と私以外の全てとの関係性の中で、そのものたちをありのままに観てありのままに行うとき、そこに大なる宇宙の真理（仏のはからい）が動き始めるということです。これが私と私以外のものとの感応道交です。その時、私は仏に出会い私自身が仏になるのです。私と地球（私以外）を対置するのではなく、地球の中の私、私の中の地球となるときです。地球も自然もそこに存在する者たちも互いが互いを内在していると観ることなのです。

道元の和歌に代表されるあまりにも仏教的で日本的な世界観に、私は地球から人間が追放されないための最後の対話のチャンスがあると考えます。ここまでの記述が直接的な論述になっていない恐れがあるので、ここに結論だけを述べます。比喩的に噴火という表現で表した地球の心身表現は、地球が勝手に怒りにまかせて噴火を起こし、暴れていると考えてはなりません。地球にある全存在の因果関係によって噴火があるのです。私の中に噴火が在り、噴火の中に私が在るということです。それは私に限らずすべての存在の中にもそれぞれの噴火があるということです。この様に世界を観ることが「ありのままに観る」ことです。そして仏のはからいそのままに行うことが「ありのままに行う」ということです。地球の心身表現は私自身の心身表現でもあると観ることができたならば、自ずと私たちが行うべきことは仏のはからいそのままに在るはずなのです。

現代に生きる人々は、地球の心身表現を科学によって解明しようと試みています。しかし科学は人間と地球を対置した主客二元論によって立つため「身」の視点のみで「心」の視点が無視されています。そもそも地球に「心」があると考えること自体、科学から見ればナンセンスなことでしょう。しか